飯島賢二の『恐縮ですが･･･一言コラム』

第 114 回　「壁際の固まり」～本音の宴会・パーティ論

宴会やパーティは、お好きですか？　どの宴会やパーティへ行っても、必ずといっていいほど「上手に楽しんでいる人」がいるものです。彼らを見ていると、見事に動き周り、多くの人と楽しそうに談笑しています。特に、最近多くなった立食式のパーティでは、得意な人と不得意な人の差が歴然と現れ、壁際で、しかもいつもの仲間だけで、こそこそと集まっているシーン、よく見かける光景ですね。

でも、もう少し細かく見ていると、少し違ったタイプがいることに気がつきます。同じようにうまく動き回っている中で、明らかに宴会やパーティが「好きな人」がいました。彼らは自分自身が「好き」ゆえに、自分で楽しみ、自分で酔い、自分のペースで宴会を終わりにしてしまっています。たぶん、本人はすごく楽しかったでしょうが、周りの人はどうだったか？　すごく疑問に思えます。次回のプライベートなパーティには、恐らくお声がかからないタイプといえる人達です。

一見、同じように見えても「うまいタイプ」の人がいます。本音を言えば彼らは宴会やパーティ、あまり好きではないかもしれません。とりわけ、知らない人がいるパーティは煩わしく、気が重いものです。それでも彼らは、うまくこなしているのです。

何故でしょうか？　その答えはきわめて明確、彼らはうまくやろうと努力しているからです。彼らはこの宴会やパーティを、最大のチャンスと捉えているからでしょう。

宴会やパーティを、自分なりに前向きに位置付ければ、出会いのチャンス、情報収集のチャンス、自分を知ってもらう絶好の機会、仕事を円滑に進めるきっかけ…こんな「宝の山」かもしれません。この認識があれば、絶対失敗は許されない場面といえるでしょう。同じ時間を費やし、同じ費用をかけて出かけていくのであれば、「壁際の固まり」であってはならないことになります。

宴会やパーティを楽しんではいけないとは言いません。でも、パーティに「努力」して出ている人は、周りの人へも「楽しさ」を与えてくれます。自分だけの遊興にのめり込んではいません。少なくとも、存在そのものが「不快」、つまりピープルポイズンになっていないこと、確かなことでしょう。

小生、本音言えば宴会やパーティ、嫌いな人です。　「確か、乾杯の時はいたんだけど…」、パーティ開始から、帰ることを考えている「不届きもの」です。誘われるうちが華、宴会・パーティにはなるべく顔を出し、衝撃的な出会いをものにすべきと反省しております。嫌いこそできる努力、努力するからこそ、有益な機会を手に入れることができる、そんな簡単なこと未だにできていない「不惑なおじさん」かもしれません。「反省」でした。